

2021年10月20日

身近な人・動物や職業上で病気や要介護から死亡まで看続けた経験が、健康に関する後回し・計画倒れ傾向を修正する可能性あり

株式会社明治安田総合研究所（代表取締役社長 神田 智尚、以下「明治安田総合研究所」）の渡辺主任研究員が2021年9月1日、日本行動計量学会第49回大会で「死を日常的に感じた経験が健康行動に及ぼす影響の検討（時間選好との関連をふまえて）」を発表しました。身近な人・動物や職業上で病気や要介護から死亡まで看続けた経験は、健康に関する時間選好に影響し、ひいては健康情報に接する行動を変える可能性があり、死を自分に身近なこととして感じる機会をつくることは、計画性・忍耐力がない人が健康行動の後回し・計画倒れを防ぐ上でも、重要である可能性が示唆されました。発表内容の抄録については、**別紙**をご参照ください。

日本行動計量学会とは、最も広い意味での人間の行動に関する計量的方法の開発と、そのさまざまな分野への適用について研究すること、計量的方法の普及ならびに研究者相互の連絡・協力を促進すること、研究成果を社会に還元することを目的とする学会です。

今回の学会はオンライン形式で開催され、渡辺主任研究員は研究成果である「人や動物を病気・要介護から死まで看続けた経験が、健康行動の後回し・計画倒れを防ぐこと」について議論を交わしました。引き続き、健康行動の変容に関する有用なあり方について研究を行ない、社会への貢献に努めてまいります。

明治安田総合研究所は、確かな安心をお届けする明治安田生命グループの一員として、クオリティの高い調査研究成果を提供し、社会に貢献します。様々な領域の専門家と協働し、お客さま視点に立った創造的かつクオリティの高い調査研究成果を発信することで、お客さまの価値創造に貢献しています。



渡辺主任研究員



発表の様子

以上

■表題

死を日常的に感じた経験が健康行動に及ぼす影響の検討（時間選好との関連をふまえて）

■発表内容概要

1 目的

時間選好は健康行動に影響を及ぼすことが既に報告されているが、健康に関する時間選好に影響する要因については不明な点が多い。身近な人・動物や職業上で病気や要介護から死亡まで看続けた経験（以下、経験）が、時間選好ひいては健康行動に及ぼす影響を検討。

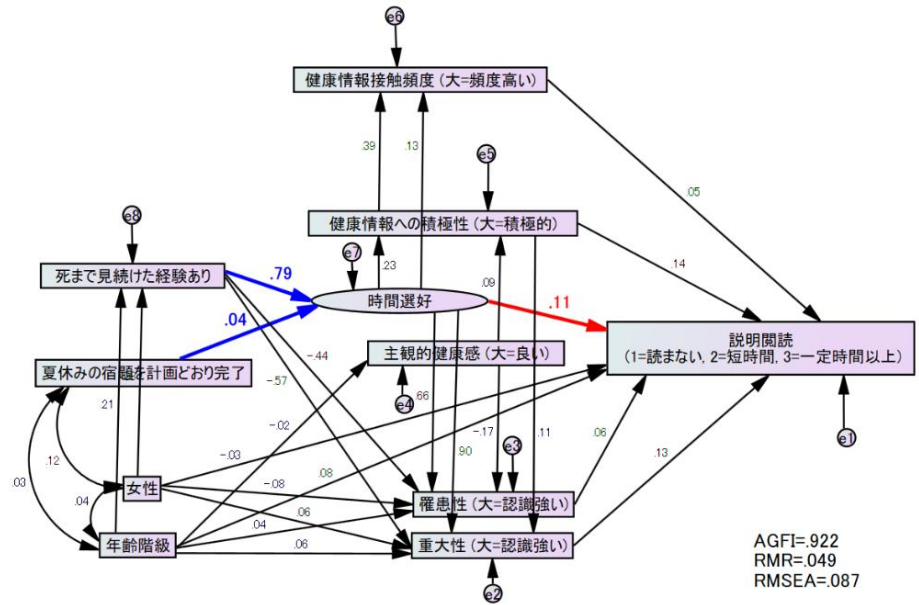
2 方法

インターネット調査（n=5,988、20～69歳）を2020年3月に実施。生活習慣病の説明を読むか否か質問した上で、読むことを選択した人には3種類の説明画像を提示し次の質問に移るまでの時間を測定した。

この質問に対する行動（読まない／読むがごく短時間／一定時間読む）を健康情報接触行動、時間選好を経験とタスクに対する計画性（小中学生時の夏休みの宿題の終わらせ方）で規定される潜在変数と設定し、性・年齢階級・主観的健康感・日常の健康情報接触頻度・健康情報への積極性・生活習慣病の罹患性および重大性の認識を投入した共分散構造分析で検討した。（続く）

3 結果

経験 ($\beta = 0.79***$) と計画性 ($\beta = 0.04**$) が時間選好に影響し、時間選好 ($\beta = 0.11***$) が健康情報接触行動に影響するモデルが得られた。



4 結論

死を日常的に感じた経験は健康に関する時間選好に影響し、ひいては健康情報接触行動を変える可能性が示唆された。

以上